

序

およそ一般外来において一番遭遇する頻度が高いのが消化器系の訴えである。腹痛，悪心，嘔吐や下痢，便秘，さらには貧血，黄疸，体重減少まで幅広い。消化器疾患の多くがcommon diseaseとよばれる所以であるが，これらを的確に診断・治療を行うことは一般診療の基本となる。そこで臨床の現場ですぐに役立つ，消化器治療薬のマニュアルとして本書が企画された。他書には無い以下の特徴がある。

1. 薬剤編（薬剤の基本がわかる）と疾患編（薬剤の選び方，使い方がわかる）の2部構成。よく使われる薬剤，よく診る疾患を編者が厳選。
2. 2色刷りのきれいな紙面。図表を多用し理解を助ける。
3. 薬剤編では，患者の状況にあわせた薬の使い方を解説。薬の特徴や作用機転，処方の実際（こんなときに使う），使いかたのポイント，合併症のある場合の注意点，副作用と留意事項，参考にしたガイドラインとエビデンスをまとめる。
4. 疾患編では，疾患と薬物治療の解説から，なぜその処方が良いのかを示す。第一選択薬とそれがうまくいかなかった場合，合併症のある場合，軽症から重症の場合など分けて細かく解説。症例を挙げ，その薬物選択のポイント，投与スケジュール，うまくいかなかったとき，患者への説明を示す。また，参考にしたいガイドラインとエビデンスをまとめる。

このような本書が消化器病の診療において多くの現場でお役に立つことを心から願っている。お忙しい中，編者の複雑で細かな要求を快くお引き受け頂いたご専門の筆者の先生方に深甚なる感謝を申し上げます。

2010年8月

高橋信一